

努力と成果の随伴性による原因帰属が動機づけに及ぼす効果

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

川崎弥生

(日本学術振興会 (専修大学 人間科学部))

The effects of causal attribution by contingency between an effort and a result on motivation

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Yayoi KAWASAKI

(Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Sciences/School of Human Sciences, Senshu University)

要旨: 研究 I では、豊田 (2016) と同じく、大学生を対象にして、努力して成功した場合、努力せず成功した場合、努力したが失敗した場合、及び努力せず失敗した場合を設定した。そしてその際に、感情、原因帰属、及び次への意欲を評定させた。その結果、努力帰属評定値と意欲度評定値との間に正の相関関係が認められた。これにより、努力帰属が動機づけを導くことが示唆された。また、努力と結果が随伴している場面で努力帰属が高まり、随伴していない場面で他の帰属傾向の高まることが明らかにされた。研究 II では、参加者の個人差要因として、随伴経験量と努力帰属との関係を検討した。その結果、随伴経験量と努力帰属評定値の間に正の相関は認められなかった。しかし、豊田 (2016) と同様に、随伴経験量と意欲度評定値の間に正の相関が認められた。研究 I と II を通して性差が認められたので、原因帰属の指導において性差を考慮することの必要性が議論された。

キーワード: 原因帰属 causal attribution
随伴経験 experience of contingency
動機づけ motivation

1. はじめに

Weiner, Heckhausen, Meyer & Cook (1972) は、能力、努力、課題の困難度及び運という 4 つの原因帰属要因を設け、安定性 (安定-不安定) 及び統制の位置 (内的-外的統制) 次元という 2 つの次元で分類した。安定性の次元では、時間的に変化の少ない安定した要因である能力と課題の困難度、時間的に変化の多い不安定な要因である努力と運に分けられる。一方、統制の位置次元によっては、自分の内側にある内的統制要因である能力と努力、自分の外側にある外的統制要因である課題の困難度と運に分けられている。また、Weiner (1979) は、上述した 2 つの次元に統制可能な次元を加えている。

この原因帰属と学習意欲の関係を調べた過去の研究を総括すると、学習意欲の高い者は、成功の原因を自分の能力や努力に帰属し、失敗の原因を努力不足に帰属する。一方、学習意欲の低い者は、成功の原因を課題の困難度 (容易さ) や運に帰属し、失敗の原因を自分の能力不足に帰属することが知られている (豊田, 2003)。

豊田 (2016) は、仮想場面法を用いて、試験結果が良い場合と悪い場合 (成功・失敗) 及び試験に対する努力がある場合とない場合 (努力の有無) を組み合わせた 4 場面 (成

功・努力有, 成功・努力無, 失敗・努力有, 失敗・努力無) に対する感情と次の試験に対する意欲の関係を検討した。研究 I では、努力しないで成功した場合よりも努力して成功した場合の方が、努力して失敗した場合よりも努力しないで失敗した場合の方が、感情評定値及び意欲評定値 (動機づけ) とともに高くなることが示された。これらの結果は、努力と結果 (成功・失敗) の随伴性の重要性を示唆した。研究 II では、参加者の個人差要因と、感情評定値及び意欲評定値の関係を検討した。その結果、失敗した場面においては内的統制傾向の高さと動機づけが関連することが明らかになった。内的統制傾向とは、原因を自分の内的な要因に帰属する傾向であり、Rotter (1966) が考案した個人差特性である。したがって、内的統制傾向の高い者は内的な要因に原因帰属をする傾向があり、その結果、失敗場面において動機づけが高まる可能性がうかがえる。ただし、豊田 (2016) では、調査項目として、参加者の原因帰属を調べる項目を設定しなかった。それ故、各場面における原因帰属と動機づけ (次の試験への意欲) の関係が明らかではなかった。

そこで、本研究では、豊田 (2016) で用いた同じ 4 場面を用い、各場面においてその原因帰属を調べる項目を追加し、原因帰属と動機づけの関係を検討する。具体的には、以下の 4 つの予想を検討するのが、本研究の第 1 の目的で

ある。

(1) 頑張って勉強して良い成績をとった場合 (成功・努力有)

努力したので、試験の成績が良かったと努力帰属をすれば、次のテストもこの調子で努力してがんばろうと思う。そのため、努力帰属が高いほど、次への意欲 (次のテストへの意欲) も高くなるであろう。すなわち、努力帰属評定値と次のテストへの意欲評定値の間には正の相関があると予想できる (第1の予想)。

(2) 勉強せず良い成績をとった場合 (成功・努力無)

試験の成績が良かったのは自分の能力が高いからであると能力帰属すれば、努力しなくても大丈夫だと思ひ、次への意欲は低くなるであろう。すなわち、能力帰属評定値と次のテストへの意欲評定値の間には負の相関があると予想できる (第2の予想)。

(3) 勉強したのに、悪い成績をとった場合 (失敗・努力有)

自分は努力が足りなかったから成績が悪かったと努力帰属すれば、次のテストはもっと努力してがんばろうと思う。そのため、努力帰属が高いほど、次への意欲も高くなるであろう。すなわち、努力帰属評定値と意欲評定値の間には正の相関があると予想できる (第3の予想)。

(4) 勉強せず悪い成績をとった場合 (失敗・努力無)

努力しなかったから成績が悪かったのは当然だと努力帰属すれば、次のテストはもっと努力してがんばってみようと思う。そのため、努力帰属が高いほど、次への意欲も高くなるであろう。すなわち、努力帰属評定値と意欲評定値の間には正の相関があると予想できる (第4の予想)。

総じて、場面にかかわらず、努力帰属が次への意欲を規定すると予想した。

また、豊田 (2016) では、原因帰属に関する評定は行なわれなかったため、場面による原因帰属の違いを明らかにされなかった。そこで、本研究では、帰属評定値を場面間で比較し、どの場面においてどの帰属が高まるかを検討する。

努力と成果が随伴している場面 (成功・努力有, 失敗・努力無) では、努力の有無と成功・失敗が随伴している (対応している) ので、努力帰属が高まるであろう。逆に、努力と成果が随伴していない場面 (成功・努力無, 失敗・努力有) では、努力の有無と成功・失敗が非随伴している (対応していない) ので、努力帰属が低くなり、むしろ能力帰属や他の帰属要因に対する帰属が高まるであろう。

これらの予想を検討するのが、本研究の第2の目的である。

2. 研究 I

2.1. 調査対象

関西と関東に位置する大学及び看護学校から学生合計300名 (男子136名、女子164名) が調査に協力してくれた (平均年齢は、19.14歳)。これらの参加者は、著者

らの授業を受講した者であった。参加者には、調査用紙の提出は任意であり、成績とは関係ないこと、研究として結果を公表する場合があるが、個人名は特定されないことが説明された。そして、調査終了後、研究の主旨を説明し、賛同できる場合にのみ提出を求めた。

2.2. 調査内容

豊田 (2016) と同じく、仮想場面を4場面 (自分が努力して良い結果の場合、努力せずに良い結果の場合、努力して悪い結果の場合、努力せずに悪い結果の場合) を設定した。そして、各4場面、その時の感情、4つの原因帰属 (努力、能力、課題の困難度、運) 及び意欲度 (次への意欲; 豊田 (2016) では努力度と表記) を6段階で評定してもらった。4つの場面とそれに対応する質問及び評定尺度は、A4判の用紙に印刷された。以下に、成功・努力有場面における一連の質問と評定尺度を示した。ただし、() 内の表記は印刷されていない。

(A) あなたは、ある試験のために、とても頑張って勉強し、準備はできていると考えていました。そして、試験は、良い成績でした。

1) その時のあなたの気持ちは? (感情評定)

	と	か	や	や	か	と	
	て	な	や	や	な	て	
	も	り			り	も	
嫌な感じ	1	2	3	4	5	6	良い感じ

2) どうして良い成績がとれたのですか?

①努力したから (努力帰属評定)

	全	あ	ほ	や	か	と	
	く	ま	と	や	な	て	
		り	ん		り	も	
			ど				
あてはまらない	1	2	3	4	5	6	あてはまる

②能力が高かったから (能力帰属評定)

	全	あ	ほ	や	か	と	
	く	ま	と	や	な	て	
		り	ん		り	も	
			ど				
あてはまらない	1	2	3	4	5	6	あてはまる

③試験が簡単だったから (課題帰属評定)

	全	あ	ほ	や	か	と	
	く	ま	と	や	な	て	
		り	ん		り	も	
			ど				
あてはまらない	1	2	3	4	5	6	あてはまる

④ 運が良かったから (運帰属評定)

全 あ ほ や か と
く ま と や な て
り ん り も
ど

あてはまらない 1 2 3 4 5 6 あてはまる

3) あなたは、次回の試験に向けて、どの程度努力するでしょうか? (意欲評定値)

全 あ ほ や か と
く ま と や な て
り ん り も
ど

努力しない 1 2 3 4 5 6 努力する

2.3. 調査手続き

調査は、記名式で集団的に実施された。著者らが調査者となり、授業時間に研究の主旨を説明してから、調査用紙を配布し、調査への協力を求めた。この調査に回答するか否かは任意であり、成績には関係ないことが説明された。その後、各場面に対する質問項目を調査者が読み上げ、参加者は、該当する数字に○印をして回答した。調査時間は、約6分以内であった。

2.4. 結果と考察

Table 1 に、場面ごとの感情、原因帰属及び意欲度評定値の平均、及び各帰属要因への帰属度評定値と意欲度評定値との相関係数 (r) を示した。

(1)感情評定値

本研究の目的ではないが、感情評定値については、豊田 (2016) の結果が追証されるか否かを確認するために、分析を行った。感情評定値について、2 (性) × 2 (成功・失敗) × 2 (努力の有無) の分散分析を行った結果、成功・失敗の主効果 ($F_{(1, 298)}=2799.98, p<.001$)、努力の有無の主効果 ($F_{(1, 298)}=29.74, p<.001$) 及び成功・失敗×努力の有無の交互作用 ($F_{(1, 298)}=533.67, p<.001$) が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行った結果、努力のある場合 ($F_{(1, 596)}=3154.86, p<.001$) 及び努力のない場合 ($F_{(1, 596)}=805.36, p<.001$) とともに、成功・失敗の単純主効果が有意であった。ただし、努力のある場合が成功・失敗による感情評定値への影響が大きいことがわかる。すなわち、努力した場合には、試験結果が良い成績であれば快感情を持ち、悪い試験結果であれば、不快感情をもつ傾向があるが、その傾向が努力のある場合が、ない場合よりも大きくなるのである。

また、試験結果が良い場合に努力の有無による単純主効果が有意であった ($F_{(1, 596)}=160.05, p<.001$)。この結果は、豊田 (2016) が設定した予想と一致し、自分が努力して成功した場合が、自分が努力しないで成功した場合よりも快感情が高くなることが追証されたのである。一方、試

験結果が悪い場合においても努力の有無による単純主効果が有意であった ($F_{(1, 596)}=411.98, p<.001$)。これも豊田 (2016) の結果と一致し、自分が努力しないで失敗した場合は、努力して失敗した場合よりも、不快感情は低いことが追証された。そこには、努力していないので自尊感情が低下しないために、それほど不快感情が喚起されない可能性が反映していると考えられる (豊田, 2016)。

Table 1

場面ごとの感情、帰属及び意欲度評定値の平均と
帰属と意欲度評定値の関係 (r)

試験結果 努力の有無	良 (成功)		悪 (失敗)		
	有	無	有	無	
感情					
男子	<i>M</i>	5.58	4.88	1.57	2.77
	<i>SD</i>	0.71	1.17	0.84	0.80
女子	<i>M</i>	5.73	4.85	1.40	2.74
	<i>SD</i>	0.54	1.09	0.62	0.76
帰属					
努力 男子	<i>M</i>	5.39	2.04	3.01	5.29
	<i>SD</i>	0.85	0.93	1.50	1.15
	<i>r</i>	.33**	.23*	.22*	.23*
女子	<i>M</i>	5.51	2.14	2.79	5.44
	<i>SD</i>	0.69	1.01	1.42	1.11
	<i>r</i>	.26*	.16	.08	.04
能力 男子	<i>M</i>	3.76	4.07	4.05	3.69
	<i>SD</i>	1.30	1.44	1.31	1.54
	<i>r</i>	-.20*	-.39**	.20*	.04
女子	<i>M</i>	3.26	3.48	4.27	3.78
	<i>SD</i>	1.17	1.43	1.25	1.33
	<i>r</i>	-.12	-.14	.15	.14
課題 男子	<i>M</i>	4.03	5.07	4.63	3.57
	<i>SD</i>	1.16	1.03	1.05	1.42
	<i>r</i>	-.09	-.08	.11	-.11
女子	<i>M</i>	3.86	5.00	4.70	3.55
	<i>SD</i>	1.26	0.96	1.01	1.26
	<i>r</i>	-.26*	-.26*	-.06	-.14
運 男子	<i>M</i>	3.54	5.00	4.08	3.54
	<i>SD</i>	1.39	1.12	1.35	1.46
	<i>r</i>	.06	.01	-.08	.03
女子	<i>M</i>	3.66	5.35	4.02	3.27
	<i>SD</i>	1.26	0.74	1.39	1.34
	<i>r</i>	-.13	-.15	-.30**	-.17
意欲度					
男子	<i>M</i>	4.69	3.67	4.63	4.59
	<i>SD</i>	0.95	1.38	1.41	1.27
女子	<i>M</i>	4.84	4.00	4.65	4.84
	<i>SD</i>	0.97	1.18	1.21	0.95

* $p<.05$ ** $p<.01$

(2)意欲度評定値

Table 1の最下欄に示されている意欲度評定値についても、豊田(2016)の結果との一致を確認するために分散分析を行った。その結果、成功・失敗の主効果($F_{(1, 298)}=47.76, p<.001$)、努力の有無の主効果($F_{(1, 298)}=79.07, p<.001$)、性×努力の有無の交互作用($F_{(1, 298)}=4.58, p<.05$)及び成功・失敗×努力の有無の交互作用($F_{(1, 298)}=106.42, p<.001$)が有意であった。性×努力の有無の交互作用について単純主効果検定を行った結果、男女ともに、努力の有無による単純主効果は有意であったが(男子は $F_{(1, 298)}=60.86, p<.001$;女子は $F_{(1, 298)}=22.79, p<.001$)、女子よりも男子の方が努力した場合としない場合の意欲度評定値の差が大きかった。すなわち、男子は努力した場合には次への意欲が高いが、努力がない場合にはその意欲が女子よりも低くなる傾向がある。また、努力がない場合の意欲度評定値は、男子よりも女子の方が高かった($F_{(1, 596)}=6.44, p<.05$)。

また、成功・失敗×努力の有無の交互作用が有意であったので単純主効果検定を行った結果、努力のある場合には、成功・失敗の単純主効果が有意傾向($F_{(1, 596)}=2.86, p<.10$)であったが、努力のない場合は、その単純主効果は有意であった($F_{(1, 596)}=144.48, p<.001$)。豊田(2016)では、成功した場合には、努力のある場合がない場合よりも次の試験への意欲度評定値は高いが、失敗した場合には、努力のない場合がある場合よりも次の試験への意欲度評定値が高いことを示した。しかし、本研究の結果は、成功した場合は豊田(2016)と一致したが、失敗した場合には意欲度評定値に有意な差は見られなかった。ただし、女子の評定値は豊田(2016)と一致して、努力のない場合の方がある場合よりも高くなっている。

全体として、豊田(2016)と同様に、感情評定値においても意欲度評定値においても、努力と成果が随伴している場合の方が随伴していない場合よりも高い。この結果は、努力と成果の随伴性の認識が感情や動機づけにとって重要であることを追認したといえる。

(3)原因帰属評定値

本研究の第2の目的に対応して、場面による帰属の違いを検討するために、帰属評定値ごとに分散分析を行った。

1)努力帰属評定値 努力帰属評定値に関して分散分析を行った結果、成功・失敗の主効果($F_{(1, 298)}=39.31, p<.001$)、努力の有無の主効果($F_{(1, 298)}=65.82, p<.001$)及び成功・失敗×努力の有無の交互作用($F_{(1, 298)}=1565.29, p<.001$)が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行った結果、努力のある場合($F_{(1, 596)}=689.96, p<.001$)には、成功した場合の方が失敗した場合よりも評定値が高かったが、努力のない場合($F_{(1, 596)}=1140.08, p<.001$)には、失敗した場合の方が成功した場合よりも評定値が高かった。この結果は、努力と成果が随伴している場面(成功・努力有及び失敗・努力無)において努力に原因帰属する可能性の高まることを明らかにしている。

2)能力帰属評定値 能力帰属評定値についても、同様の分散分析を行った。その結果、成功・失敗の主効果($F_{(1, 298)}=10.09, p<.01$)及び性×成功・失敗の交互作用($F_{(1, 298)}=13.54, p<.001$)が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行った結果、男子では、成功した場合と失敗した場合の間に能力帰属評定値に有意な差は見られなかったが($F=.13$)、女子では失敗した場合が成功した場合よりも能力帰属評定値が有意に高かった($F_{(1, 596)}=23.50, p<.001$)。この結果は、女子が失敗した場合には能力不足に原因帰属しやすいことを示唆している。

また、成功・失敗×努力の有無の交互作用($F_{(1, 298)}=42.14, p<.001$)が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行った結果、努力のある場合($F_{(1, 596)}=35.21, p<.001$)には、失敗した場合が成功した場合よりも能力帰属評定値が高かったが、努力のない場合には成功と失敗場面間に有意な差は見られなかった($F=.15$)。この結果は、努力していない場合には、成功しても失敗しても、能力への帰属はほとんど影響されないことを示唆している。しかし、努力をしている場合には、成功して自分の能力の高さに原因帰属するよりも、失敗して自分の能力不足に原因帰属する可能性の高いことを示唆している。要するに、失敗した方が能力に原因帰属しやすいことがわかる。逆に言えば、成功してもそれほど自分の能力の高さに原因帰属しない傾向がうかがえる。

3)課題帰属 課題帰属評定値に関して同様の分散分析を行った結果、成功・失敗の主効果($F_{(1, 298)}=30.60, p<.001$)及び成功・失敗×努力の有無の交互作用($F_{(1, 298)}=414.25, p<.001$)が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行ったところ、努力のある場合には成功・失敗の単純主効果が有意であり($F_{(1, 298)}=67.12, p<.001$)、成功した場合よりも失敗した場合に課題帰属評定値が高かったが、努力のない場合には、成功した場合の方が失敗した場合よりも課題帰属評定値が高かった($F_{(1, 298)}=285.74, p<.001$)。また、成功した場合には、努力のない場合の方が努力のある場合よりも課題帰属評定値が高く($F_{(1, 298)}=230.61, p<.001$)、失敗した場合は努力のある場合の方が努力のない場合よりも課題帰属評定値が高かった($F_{(1, 298)}=233.72, p<.001$)。この結果は、努力帰属と全く反対の傾向であり、努力と成果が随伴していない非随伴場面(成功・努力無及び失敗・努力有)において課題帰属が高まることを示唆している。

4)運帰属評定値 運帰属評定値に関する分散分析の結果、成功・失敗の主効果($F_{(1, 298)}=95.27, p<.001$)及び努力の有無の主効果($F_{(1, 298)}=75.93, p<.001$)及び性×成功・失敗の交互作用($F_{(1, 298)}=8.77, p<.001$)が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行ったところ、男女ともに成功の場合の方が失敗の場合よりも運帰属評定値が高かったが、男子でも女子でも成功の方が失敗よりも運帰属評定値が高く、それらの差については女子の方が大きいことがわかる(男子:成功 4.27 失敗 3.81 差.46、($F_{(1,$

$_{298})=23.12, p<.001$ 女子:成功 4.50 失敗 3.64 差.86 ($F_{(1, 298)}=80.91, p<.001$)。この結果から、男子よりも女子の方が成功した場合にはより運が良かったと考え、失敗すればより運が悪かったと考える傾向にあることが示唆される。また、成功・失敗×努力の有無の交互作用 ($F_{(1, 298)}=366.56, p<.001$) が有意であった。さらに、性×成功・失敗×努力の有無の交互作用が有意であった ($F_{(1, 298)}=3.90, p<.05$)。この交互作用について、単純交互作用検定を行ったところ、努力がある場合には、性×成功・失敗の単純交互作用が有意でなく ($F = .92$)、努力がある場合には成功失敗による運帰属評定値において男女差はなかった。しかし、努力がない場合には、性×成功・失敗の単純交互作用 ($F_{(1, 596)}=12.48, p<.01$) が有意であった。この単純交互作用について単純・単純主効果検定を行ったところ、成功・努力無の場合には女子の方が男子よりも運帰属評定値が高く ($F_{(1, 1192)}=5.73, p<.05$)、反対に失敗・努力無の場合には男子が女子よりも運帰属評定値の高い傾向があった ($F_{(1, 1192)}=3.49, p<.07$)。

総じて、努力と成果が随伴していない場面(成功・努力無、失敗・努力有)において、能力、課題及び運帰属傾向の高まることが明らかになった。これは予想通りであり、努力と成果の随伴性が上述した努力帰属だけでなく、その他の帰属傾向にも影響していることが示された。

(4) 帰属評定値と意欲度評定値との関係

本研究の第1の目的は、上述した4つの予想を検証することであった。成功・努力有場面においては、男女 ($r=.33, .26$) とともに努力帰属評定値と意欲度評定値の間に有意な正の相関が得られ、第1の予想と一致した。すなわち、試験の成績が良かったのは努力したからであると原因帰属をすることで、次への意欲も高くなることがわかった。

第2の予想は、成功・努力無場面において能力帰属評定値と意欲度評定値の間には負の相関があるというものであった。この予想と一致して、男子では有意な負の相関 ($r=-.39$) が認められたが、女子では負の相関は有意ではなかった ($r=-.14$)。したがって、男子においては努力しなくて自分は能力が高いから大丈夫だと思えば、次のテストで頑張ろうという意欲は乏しくなることがわかったが、女子ではこの傾向は乏しいといえよう。

第3の予想は、失敗・努力有場面では、努力帰属評定値と意欲度評定値の間には正の相関があるというものである。男子は予想と一致して、有意な正の相関 ($r=.22$) が認められたが、女子では相関は有意でなかった ($r=.08$)。男子に関しては、自分は努力が足りなかったから成績が悪かった、と努力帰属すれば、次への意欲も高くなることがわかった。しかし、女子においては、その関係が明確にはならなかった。

第4の予想は、失敗・努力無場面では、努力帰属評定値と意欲度評定値の間には正の相関があるというものである。この予想についても、男子においてのみ一致し、有意な正

の相関が認められた ($r=.23$)。したがって、男子は、自分は努力しなかったから成績が悪かったのは当然だ、と努力帰属すれば、次への意欲も高くなることがわかった。しかし、女子においては、その関係は見いだせなかった。

また、場面にかかわらず、努力帰属が次への意欲を規定すると予想した。この予想通り、男子においてはどの場面においても、努力帰属評定値と意欲度評定値との間に有意な正の相関が得られたが、女子では成功・努力有場面に限定された。したがって、男子においては従来の研究 (Dweck, 1975) で指摘されてきたように、努力帰属が次への意欲を規定することが追認されたのである。

予想していない結果も見いだされた。男子では、失敗・努力有場面で、能力帰属評定値と意欲度評定値の間に正の相関が認められた ($r=.20$)。男子においては、努力して失敗した場面で能力帰属することで意欲が喚起される可能性があることが示唆された。それに対して、女子においては、成功した場合には努力有と無の両場面において課題帰属評定値と意欲度評定値において負の相関が見いだされた (ともに $r=-.26$)。女子は成功した場合に、課題帰属すると、次への意欲が低下する傾向があることがわかった。また、失敗・努力有場面において、女子では運帰属評定値と意欲度評定値の間に負の相関が認められた ($r=-.30$)。すなわち、努力したのに失敗した場合に、その原因を運に求める女子は、次への意欲が生じにくいと考えられる。このように、能力帰属評定値と意欲度評定値の関係に性差が認められたのも本研究での注目すべき点であるが、この性差の原因については現時点では明らかでない。

3. 研究 II

豊田 (2016) の研究 II では、参加者の対人関係における随伴経験量を牧・関口・山田・根建 (2003) によって開発された尺度で測定し、その尺度得点と意欲度評定値との関係を検討した。その結果、随伴経験量と意欲度評定値の間に正の相関を見いだした。この結果は、随伴経験量が多いと、努力すれば成果として報われるという信念が形成され、努力帰属が高まり、それが意欲に反映されると解釈された。ただし、上述したように、豊田 (2016) では各場面における原因帰属を測定していない。それゆえ、随伴経験量が努力帰属を促し、その結果として意欲が高まるという関係が検討されていなかった。そこで、本研究は、各場面において原因帰属を調べ、上述した関係の妥当性を検討することを目的とする。

3. 1. 調査対象

関東及び関西に位置する2つの大学生 259名 (男 121, 女 138名) を調査対象とした (平均年齢は 19.09歳)。これらの参加者は、著者らの授業を受講したものであり、調査用紙の提供に関しては、研究 I と同じく、研究の主旨に賛同できる場合のみ提出を求めた。

3. 2. 調査内容

(1) 仮想場面による感情と意欲調査 研究 I と同じものを用いた。

(2) 主観的随伴経験尺度 牧ら(2003)が開発した対人関係場面における随伴経験量と非随伴経験量を測定するための尺度を用いた。これは、豊田(2016)の研究 II で用いた尺度と同じであった。この尺度は、対人関係における随伴経験を調べる 15 項目(例「友人の悩みを聞いてあげたら、感謝された」)と非随伴経験を調べる 15 項目(例「自分は信用していたのに、友人が自分を信用してくれなかった」)からなり、回答には 4 件法が用いられた。「全く経験したことがない(1)」「あまり経験したことがない(2)」「少しは経験したことがある(3)」「よく経験したことがある(4)」

3. 3. 調査手続き

調査は、著者らの授業において、記名式で集団的に実施された。(1)の調査用紙を配布し、調査への協力を求めた。調査の回答の仕方等は、研究 I と同じである。(2)の調査に関しても、著者らの授業で実施し、調査時間は 8 分程度であった。調査終了後、上述した学生が回答を提出してくれた。

3. 4. 結果と考察

Table 2 に、場面ごとの感情、帰属及び意欲評定値と、随伴・非随伴経験得点との相関係数 (r) を示した。

(1) 感情評定値との関係

本研究の目的ではないが、次への意欲と随伴及び非随伴経験の関係を検討するために、相関係数を算出した。その結果、Table 2 の最上欄に示されているように、男子では成功・努力有場面において随伴経験得点との間に有意な正の相関が得られた。この結果は、Table 1 (研究 I) の平均値をみれば、努力して成功した場合には快感情が喚起されるが、中でも随伴経験量の多い者がより快な感情を持ちやすいことを示している。一方、女子はこのような傾向はなかった。また、失敗・努力有場面において、男子は、非随伴経験得点との正の相関が得られた。研究 I の Table 1 の評定平均値 (男子 1.57 女子 1.40) 及び研究 II の評定平均値 (男子 1.58 女子 1.41) からすると、努力したにもかかわらず、失敗した場面では不快感情が喚起されるが、その中にあると、男子では非随伴経験量が多いと、不快な感情が緩和される傾向がうかがえる。努力して失敗する場面は非随伴経験と共通した場面であるので、日頃からそのような場面に対する慣れがあり、不快な感情がそれほど喚起されないのであろう。しかし、女子にはその傾向は認められなかった。

女子では、男子と異なり、非随伴経験と意欲度との関係が見いだされた。すなわち、努力の有無にかかわらず、成功した場合には快感情が喚起されるが、女子では非随伴経験量が多いとその感情が抑制される傾向がうかがえる。一方、男子にはその関係は認められなかった。特に、努力せ

Table 2 場面ごとの感情、帰属及び意欲度評定値と随伴及び非随伴経験得点間の関係 (r)

試験結果 努力の有無 性	良 (成功)				悪 (失敗)			
	有		無		有		無	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
感情評定値との関係								
随伴経験	.22*	.09	.12	-.03	-.10	-.06	.12	-.02
非随伴経験	.01	-.20*	-.15	-.36**	.21*	.01	-.02	-.08
努力帰属評定値との関係								
随伴経験	.09	.11	.00	.16	.06	-.06	.18*	.03
非随伴経験	-.10	-.14	.07	-.08	-.02	.07	-.04	-.03
能力帰属評定値との関係								
随伴経験	-.06	.14	.04	.27**	.06	.03	-.03	.03
非随伴経験	-.03	-.14	-.05	-.10	.07	.15	.04	.23**
課題帰属評定値との関係								
随伴経験	-.02	-.05	.14	.15	.06	-.03	.05	.03
非随伴経験	-.11	-.04	-.17	-.06	-.15	-.11	-.03	.04
運帰属評定値との関係								
随伴経験	.11	-.04	.22*	.05	.12	-.04	.17	.01
非随伴経験	.01	.05	.05	.06	-.16	-.07	.08	.08
意欲度評定値との関係								
随伴経験	.29**	.10	.16	.07	.19*	.05	.26**	-.05
非随伴経験	.12	-.01	.05	.05	.02	.07	.06	.05

* $p < .05$ ** $p < .01$

ずに成功した場合 ($r=-.36$) には、非随伴経験量によって女子は快感情が抑制される傾向の強いことがわかった。

(2)努力帰属評定値との関係

研究Ⅱは、随伴経験量が努力帰属を促し、その結果意欲が高まるという図式の妥当性を検討することが目的であった。随伴経験得点と努力帰属評定値の相関をみると、男子の失敗・努力無場面を除いて、どの場面でも有意な正の相関が認められなかった。このことは、随伴経験によって努力帰属が促されるという関係が本データに関しては妥当でないことを示唆している。豊田 (2016) では、随伴経験を対人関係における随伴経験量として、牧ら (2003) の尺度を用いた。しかし、豊田 (2016) も、本研究でも仮想場面は学習場面であるので、豊田・濱邊・浦 (2013) によって開発された学習活動における随伴経験量を測定する尺度を用いた方が妥当であった可能性がある。本研究では先行研究との比較をする必要から、牧ら (2003) の尺度を用いているが、この点については今後の検討課題である。また、本研究では、努力帰属評定値と随伴経験得点との相関を指標としたが、努力帰属評定値の分布の幅が乏しく、そのことが相関係数の大きさに反映されないという方法論上の問題もある。この点も今後の検討課題である。

(3)能力帰属評定値との関係

男子では、能力帰属評定値と随伴及び非随伴経験得点との有意な相関は認められなかった。一方、女子では、成功・努力無場面において随伴経験得点と能力帰属評定値の間に正の相関が認められた ($r=.27$)。この結果は、女子が努力しないで成功した場合に、随伴経験量が多いと、自分の能力の高さに原因を帰属する傾向があるといえよう。また、失敗・努力無場面において非随伴経験得点と能力帰属評定値との間に正の相関が認められた

($r=.23$)。この結果は、女子が努力しないで失敗した場合に、非随伴経験量が多いと、自分の能力不足に帰属する傾向があるということである。男子ではこのような傾向はいずれも認められなかった。

(4)課題帰属評定値との関係

男女ともに、課題帰属評定値と随伴及び非随伴経験得点との有意な相関は認められなかった。したがって、随伴及び非随伴経験量によって、課題帰属が影響される可能性は少ないことが示唆された。

(5)運帰属評定値との関係

成功・努力無場面においてのみ、随伴経験得点と運帰属評定値との有意な正の相関が認められた ($r=.22$)。努力しないで、成功した場面では随伴経験量が多い男子は、運に原因を帰属する傾向があることがわかる。

(6)意欲評定値との関係

男子では、成功・努力無場面を除く3場面において、随伴経験得点と意欲評定値の間に正の相関が認められた。これにより、豊田 (2016) と同様に、随伴経験によって次への意欲が喚起されるということが追証された。しかし、興味深いことに、女子においてはそのような相関が全く認め

られなかった。豊田 (2016) では、女子においても有意な正の相関が認められたのに対し、本研究ではそのような相関が得られなかった。このような女子における結果の不一致の原因は、現時点では明らかではないが、1つの可能性として、意欲評定値という分布範囲の狭い変量と随伴経験量の相関を算出することに方法論上の問題が挙げられる。しかしながら、従来の研究からは、随伴経験が意欲に関連する変数との関連が指摘されてきている。例えば、自己効力感 (牧ら, 2003; 豊田, 2006)、自尊感情 (豊田, 2006)、内的統制傾向 (豊田, 2014)、友人への安心感 (豊田, 2015a, b)、情動知能 (豊田, 2015b; 豊田・島津, 2006) である。したがって、随伴経験と意欲の間の相関は今までも認められているので、方法論の問題以上に、注目されてこなかった性差の影響の大きいことが示唆される。

4. 総括的議論

4.1. 帰属と意欲の関係における性差

研究Ⅰでは、努力帰属と次への意欲との関係が示された。女子では、相関係数に表れた両者の関係が弱かったが、男子ではどの場面においても、努力帰属と意欲評定値の間に有意な正の相関が認められた。

豊田 (2016) では帰属評定値が測定されなかったことで、原因帰属と意欲との関係は明らかになっていなかったが、本研究ではその関係が明らかとなった。しかし、研究Ⅱの考察においても言及したように、男子と女子の相関係数の値の違いに反映されている性差は注目すべき点である。学校教育において、原因帰属に関する指導は重要である。児童・生徒が本心から自分の努力不足であるという認識が生じれば、次への意欲がわいてくる。しかし、本研究のデータに反映されているように、努力帰属と意欲の関係が女子においての方が男子においてよりも弱いとすると、努力帰属へ促す指導の妥当性が問題になる。すなわち、女子においては別の原因帰属に関する指導を考慮することが必要になる。その指導を考慮するための手がかりが、本研究のデータに認められる。それは、成功した場合に課題帰属評定と意欲度評定値との負の相関が女子においてのみ認められているということである。女子においては、成功した時に課題 (テスト) が簡単であったという帰属は、意欲を損なう可能性が男子よりも高いといえるので、女子においては課題帰属についても指導する必要があることが示唆された。

また、努力したのに失敗した場合 (失敗・努力有) には、女子は運帰属評定値と意欲度評定値の間に大きな負の相関が認められている ($r=-.30$)。この結果は、努力して失敗した場合に、女子には運帰属をさせないように指導する必要があるということを示唆している。努力しても運が悪かったと考えてしまうと、次への意欲が損なわれてしまうからである。

上述したような性差は興味深く、ここであえて取り上

げることにしたが、何故このような性差が生じるかについては、現時点では解釈可能な文献が展望できていない。今後の課題である。

4.2. 随伴経験、帰属及び意欲の関係

研究Ⅱでは、随伴経験量が努力帰属を促し、その努力帰属が意欲を喚起するという関係を検討した。しかし、随伴経験量と努力帰属との関係は明確に示すことができなかった。ただし、研究Ⅰにおいて、努力帰属と意欲の関係は認められている。そして、随伴経験は意欲度評定との関係が男子において認められている。それゆえ、なぜ、随伴経験量が多い人は、次への意欲が喚起されるのかを明らかにすることが必要となる。

また、随伴経験には本研究で測定した対人関係の随伴経験（牧ら，2003）以外にも、学習活動における随伴経験（豊田ら，2013）もある。児童・生徒が学校教育において遭遇する経験はどのような経験であっても、意欲の向上に貢献する可能性がある。それゆえ、学校教育における活動を児童・生徒がどのようにとらえ、自分の努力がその活動の成果につながっているという随伴性を意識できているかどうかを確認することも必要であろう。

（付記）

研究Ⅰの結果については、第1著者の指導の下、奈良教育大学心理学専修3回生井上拓哉君、村田史恵さんが平成28年度大学祭（輝豊祭）において研究発表した。

引用文献

- Dweck, C. S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 674-685.
- 牧 郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 2003 主観的随伴経験が中学生の無気力感に及ぼす影響 教育心理学研究, **51**, 298-307.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies of internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80** (Whole No. 609), 1-28.
- 豊田弘司 2003 教育心理学入門—心理学による教育方法の充実— 小林出版
- 豊田弘司 2006 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **15**, 7-10.
- 豊田弘司 2014 随伴経験、統制の位置及び自尊感情の関係 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, **23**, 7-12.
- 豊田弘司 2015a 対人関係における随伴及び非随伴経験とエゴグラムの関係—居場所による媒介効果—奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **1**, 1-6.
- 豊田弘司 2015b 随伴経験、友人への安心感、情動知能及び孤独感の関係 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **1**, 7-12.
- 豊田弘司 2016 努力と結果の随伴性、感情及び動機づけの関係 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, **2**, 19-25.
- 豊田弘司・濱邊友里・浦 瑞帆 2013 学習場面における随伴経験尺度の開発 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, **22**, 27-33.
- 豊田弘司・島津美野 2006 主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼす影響 奈良教育大学紀要, **55**, 27-34.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, **71**, 3-25.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. H., & Cook, R. E. 1972 Causal ascription and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 239-300.